

【論考】

# インタビュー活動による地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築

-国際共修による双方向往来の学びを通して-

On-site Training Type Classes through interviews with Local Residents:  
By Two-Way Learning through International Coeducation

高知大学国際連携推進センター准教授 大塚 薫

OTSUKA Kaoru

(Center for International Collaboration, Kochi University)

高知大学国際連携推進センター教授 林 翠芳

LIN Cuifang

(Center for International Collaboration, Kochi University)

キーワード：体験学習型授業、国際共修、インタビュー活動、異文化間教育、多文化共生

## 1. はじめに

文部科学省が2013年11月に国立大学のミッションの再定義として掲げた「国立大学改革プラン」<sup>1</sup>の中で、「第3期に目指す国立大学の在り方」として「各大学の強み・特色を最大限に生かし、自ら改善・発達する仕組みを構築することにより、持続的な『競争力』を持ち、高い付加価値を生み出す国立大学へ」と躍進するために各大学の機能強化の方向性である「三つの枠組み」が示された。第一に、「世界最高の教育研究の展開拠点」であり、具体的には「優秀な教員が競い合い人材育成を行う世界トップレベルの教育研究拠点の形成」、「大学を拠点とした最先端の研究成果の実用化によるイノベーションの創出」が挙げられた。第二に、「全国的な教育研究拠点」であり、「大学や学部の枠を越えた

<sup>1</sup> 2004年4月に国立大学法人化がスタートし、その意義として「自律的・自主的な環境の下での国立大学活性化」、「優れた教育や特色ある研究に向けてより積極的な取組を推進」、「より個性豊かな魅力ある国立大学を実現」が挙げられた。第1期中期目標期間(2004~2010)は「新たな法人制度の『始動期』」、第2期中期目標期間(2010~2015)は「法人化の長所を生かした改革を本格化」と位置付けられた。第2期中期目標期間中の2013年に「自主的・自律的な改善・発展を促す仕組みの構築」として「国立大学改革プラン」が第3期中期目標の「持続的な“競争力”を持ち、高い付加価値を生み出す大学へ」という今後の国立大学の機能強化に向けて発表された。

連携による日本トップの研究の拠点の形成」や「世界に開かれた教育拠点の形成」、「アジアをリードする技術者養成」の強化が掲げられた。第三に、「地域活性化の中核的拠点」であり、「地域のニーズに応じた人材育成拠点の形成」、「地域社会のシンクタンクとして様々な課題を解決する地域活性化機関」としての機能強化が示された。この「三つの枠組み」を86の国立大学が選択し、その選択の枠組みに沿って教育研究を推進することになるが、「世界最高の教育研究の展開拠点」に16大学が、「全国的な教育研究拠点」に15大学、「地域活性化の中核的拠点」に55大学が名乗りを上げた<sup>2</sup>。

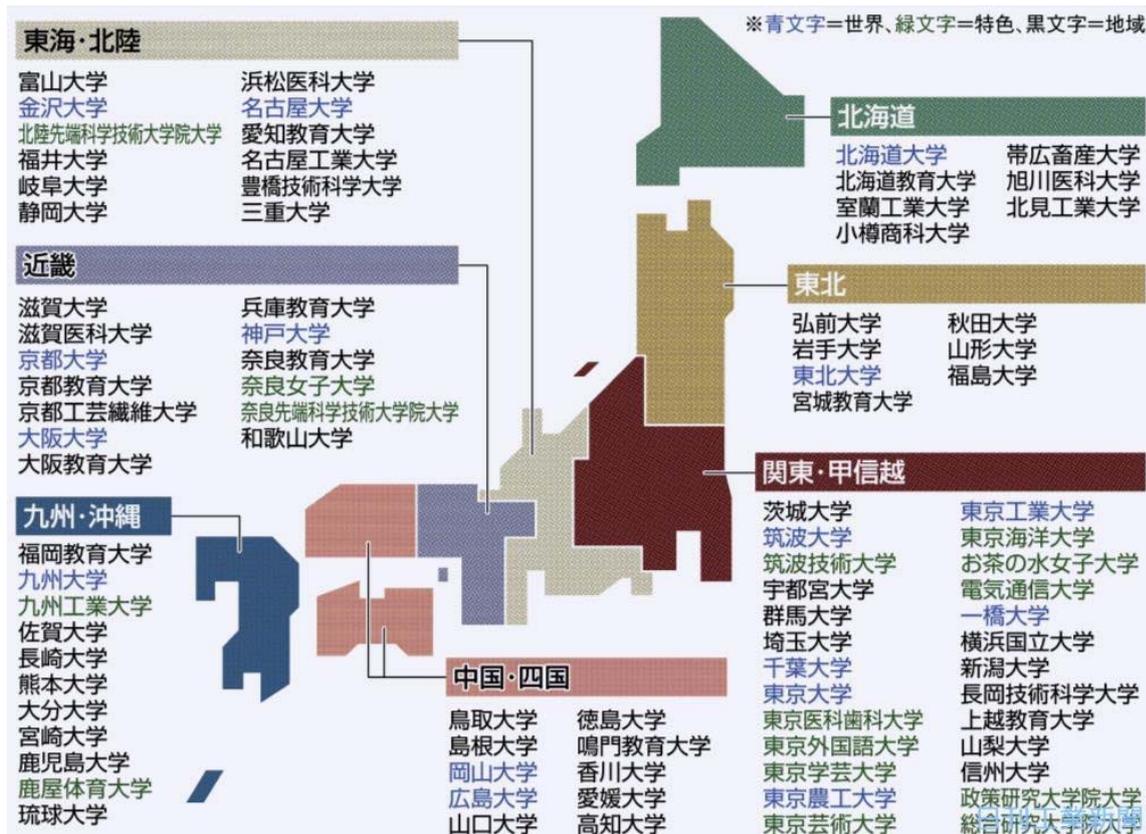


図1. 86国立大学の「三つの枠組み」選択結果

日刊工業新聞 2015年09月16日「深層断面」より

地域の国立大学である高知大学も「地域活性化の中核的な拠点」となる大学として、「地域から世界へ、世界から地域へ、グローバルな双方向の国際連携を目指す」という国際戦略を掲げ人材育成を行っている。また、外国人留学生に対しても、地域課題に関する体験型プログラムを提供することにより、国際連携を推進するという目標を設定している。

一方、高知県も「地域創生」の言葉の下、地域の食・歴史・文化・伝統芸能の継承並びに観光振興、効果的な観光客誘致、経済効果を高める取組み、商店街の活性化等と多くの地域課題を抱えている。

<sup>2</sup> 日刊工業新聞 2015年09月16日「深層断面」 <https://newswitch.jp/p/2058> (2019.07.29 閲覧)

高知大学は地域に根差す大学として、地域とともに学び研究する「知（地）の拠点」として、地域から世界に発信することが大学の使命であると言える。

このような背景の下、「地域の伝統文化を通じた観光振興」に関する教育を中心に据え、体験的な教育活動を通して外国人留学生を地域の振興に巻き込み、地域の活性化に貢献してもらうことが有効な方策だと考えられる。留学生は、地域課題の解決を試みることにより、地域とともに生きる自覚が生まれ、地域の一員として活躍することで地域の活性化に寄与することができるであろう。これに伴い、地域社会は、留学生を受け入れることによる付加価値、すなわち、図2の「留学生と地域住民との相互交流図」のように、これまでの地域社会による一方通行的な発信型（恩恵付与）にとどまることなく、留学生からの発信を受信（恩恵還元）するという、双方向送受信型の構築・互恵関係の樹立につながると考えられるからである（図2参照）。

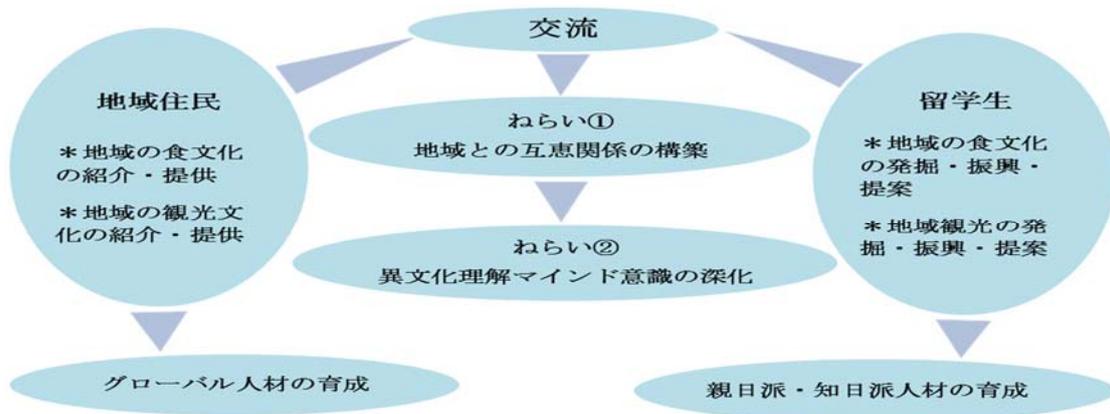


図2. 留学生と地域住民との相互交流図

本稿は、地域の大学に通う留学生というリソースが地域住民とともに地域の一員として活躍することに主眼を置き、地域住民との交流や体験的な教育活動を通して地域の文化を学ぶとともに、留学生の目線から地域の資源を見つめ、地域の活性化に寄与し、地域との互恵関係の構築を目指した地域文化体験型の授業モデルを提案したものである。

## 2. 外国人留学生が考える高知地域文化に対する理解度及び地域における活動状況

地域文化体験型授業の構築にあたり、外国人留学生が高知地域の文化や観光に対しどの程度理解し、体験しているかについて調査するために、2016年8月から2017年2月にかけて高知大学に半年以上留学している外国人留学生91名を対象に「地域文化・観光体験」に関するアンケート調査を実施し、

72名(9ヶ国・地域)から回答を得た(回答率79.1%)<sup>3</sup>。調査項目は、「観光文化体験」、「高知観光の改善点」、「日本文化・高知文化に対する理解度」、「日本人学生・地域住民との交流」等であり意見の記述を主としたが、客観式回答では5点満点の5段階で評価するとともに理由を記してもらった。

「地域文化・観光体験」に関するアンケート調査の結果、「留学を通しての日本文化に対する理解度」は、平均4.02であり、おおむね理解できていると留学生自身が考えていることがうかがえた。また、「留学を通しての高知地域文化に対する理解度」は、平均4.00であり、日本文化に対する理解度と同様の結果であった。しかし、高知地域の独特な文化を実感している留学生がいる一方、一般的な日本文化と高知独特の文化との区別が明確についていない学生がいることが見受けられた。

「留学を通じた日本人学生との交流」については、個人差があるが、平均4.00と頻度の高い交流が行われていることが分かった。全体的に、日本人学生との交流は、勉強のサポートをしてくれるチューターや語学を互いに教え合うパートナーシップでの活動、サークル活動、学内外のイベントへの参加により推進されていることが学生の記述からうかがえた。一方、「留学を通じた地域住民との交流」は平均3.54であり、留学生が日常的に関わるアルバイト先や留学生の出身国・地域に興味を持っている地元の方々との交流等が主であり、学外のイベントに参加していないと回答した留学生は、地域住民との交流がほとんどないと回答している傾向が強かった。この結果から、地元住民との交流に関しては日本人学生との交流と比較し、より個々人の積極的に交流する姿勢が問われているゆえ、交流を深化させるべく教育が介入するに値すると言える。

「高知地域における観光の改善点」としては、最も多かった意見が「交通の不便さ」であった。これは、「観光していて困った点」についても同様の結果であった。そのため、留学生が高知地域で観光した場所も高知市内が中心という結果になった。その反面、高知観光の魅力としては、「自然の豊かさ」や「人の親切さ」を多くの留学生が挙げていた。

「外国人の目線からの高知地域の観光資源についての提言」では、「乗り放題のチケット等による交通手段の改善」や「外国語表記のある詳細な地図や情報の提示」、「外国語が話せるスタッフの常駐」、「映画やドラマによる高知の宣伝」、「農家体験のイベントの周知」、「高知の酒文化を中心としたイベントによる観光客の誘致」等の意見が挙げられた。

### 3. 地域文化体験型授業モデルの構築

地域文化体験型授業とは、異文化や日本文化に対する理解を深めるための講義や高知地域の自然や文化に触れるための高知県内の施設や観光地への訪問、学生同士や地元の人々との交流から構成されている授業である。そして、留学生が高知県観光の魅力を発掘し、それぞれの目線から地域の振興に

<sup>3</sup> 詳細は、大塚・林(2019)「国際共修による地域文化体験型授業の構築—インタビュー活動を通じた地域住民との交流を主軸として—」を参照されたい。

関する提言を行うことにより、地域活性化の糸口を探ることを目的とした授業のことである。

「地域文化・観光体験」に関するアンケート調査で明らかになった地域住民との交流を深化させるためには教育活動が介入すべきであるという結果を踏まえ、地域文化体験型授業の目的としては、1) 外国人留学生及び日本人学生や地域住民との触れ合い等を通じて、地域の社会文化、ひいては日本の社会文化に対する理解を深める、2) 大学生の目線から、地域の観光資源の開発や少子高齢化等の問題について考え、解決策を提案する、3) 授業で学んだ日本語を地域社会で実践的に活用し、日本語学習に対するモチベーションを高める、の3点が挙げられる。

また、「高知地域における観光の改善点」として最も多く挙げられた「交通の不便さ」から留学生が市内のみで活動している現状を打破し、地域とのつながりを重視した内容を盛り込んだ内容の構成を目指した。さらに、2017年度に高大連携による地域文化体験を通じた地元の高校生と大学生との2回の交流学习活動<sup>4</sup>が行われたが、一方は1対1のインタビュー活動を取り入れ、もう一方は取り入れなかったため、前者の方が「交流の深まり」、「地域理解の深度」ともに促進されたという結果が導き出された。その比較から双方向型の密な交流が促される1対1のインタビュー活動等の言語運用による交流活動の重要性を鑑み、インタビュー活動を主要な活動として位置付けた。具体的には、高知地域の中山間部を含めた地域での活動を盛り込み、地域文化理解及び地元住民との言語を駆使した自主的な交流を促進する仕掛けとして、インタビュー活動を主軸に据えた地域とのつながりを重視した内容で授業を構成した。

### 3.1 地域文化体験型授業の内容

2018年10月から12月にかけて外国人留学生と日本人学生20名（内訳：外国人留学生15名（中国8名、韓国・インドネシア各2名、モンゴル・台湾・タイ各1名、日本人学生5名））を対象とし、一学期間を通して実施された地域文化体験型授業の概要を表1に示す。

2017年度には、4月から7月にかけて外国人留学生10名を対象に全学補講授業内において地域文化体験型授業を試行的に実施した<sup>5</sup>が、今回の授業は、共通教育科目の社会分野の教養科目として留学生と日本人学生の共修で行われた。佐藤他(2011)では、「国際共修(p.148)」の理念として「日本人学生と留学生が共に参加し対等な立場で交流」すること、「異なる言語・文化圏を背景とする者同士が自他の文化を比較しつつ学ぶ」こと、「意見交換や共同作業を取り入れる」ことを挙げている。また、末松(2014)では、国際共修は、「単に留学生と日本人が机を並べ同じ科目を履修することではな(p.11)」く、「言語・文化背景の異なる学生同士が知的交流を通して互いを理解し、己を見直し、最終的に新しい

<sup>4</sup> 詳細は、大塚・林(2018)「高大連携による地域文化体験を通じた交流学习活動の教育効果—地域文化理解を目的とした高校生と留学生との交流を主軸として—」を参照されたい。

<sup>5</sup> 詳細は、林・大塚・ガルシア(2017)「体験学習を通じたアクティブ・ラーニング型授業の構築」を参照されたい。

価値観の創造を自己成長へとつなげる学習機会(p. 11)」であると述べ、グローバル人材の育成に必要な能力を伸ばす教育方法として注目されていると述べている。今回の地域文化体験型授業においても、留学生と日本人学生の共修による体験・実践を通して学生の企画力、行動力、コミュニケーション力、グローバルな視野等の基礎的・汎用的能力を培う効果があり、異なる文化、異なる価値観にぶつかる社会体験を通じて心身ともに鍛えられ、主体的な学びを促し「教育の質的転換」が期待できると考えられる。それゆえ、授業における一連の活動においては、留学生と日本人学生の国際共修の相乗効果を最大限に引き出すべく、教室での協働学習並びに郊外での体験学習では留学生と日本人学生が共に学習内容を考え、共に活動できるようグループごとの活動を主とした。

表1 地域文化体験型授業の内容

回	日時	授業内容	回	日時	授業内容
1	10.03	<協働学習>オリエンテーション・事前アンケート調査	8~10	11.25	<体験学習>高知城歴史博物館・高知城見学・ひろめ市場 <sup>6</sup> ・日曜日 <sup>7</sup> でのインタビュー活動
2	10.17	<協働学習>安芸市体験学習事前学習・インタビュー活動の準備	11	12.05	<協働学習>高知市内の活動の振り返り・郷土料理に関する講義・大豊町活動準備
3~5	10.21	<体験学習(交流)>郷土料理体験・安芸市観光・地元高校生との交流(インタビュー活動含む)	12~14	12.08	<体験学習>餅つき体験・大豊町地域文化学習・地域住民との交流(インタビュー活動含む)
6	10.24	<協働学習>高知地域に関する講義・安芸市体験学習の振り返り	15	12.12	<協働学習>大豊町体験学習の振り返り・グループ討論・発表準備
7	11.21	<協働学習>学生団体の活動紹介・インタビュー活動の準備	16	12.19	グループ発表「私が考える高知地域振興」「高知観光発掘」・事後アンケート調査

表1で示したように、本地域体験型授業は、地域文化の理解を深めてもらうべく高知地域や日本文化に関する講義等を行うほか、学生団体の代表を授業に招き、高知市内において地域活性化のため地

<sup>6</sup> ひろめ市場は、「土佐藩家老の屋敷跡付近にあり、屋敷が消えた維新後もその一帯は親しみを込めて『弘人屋敷(ひろめやしき)』と呼ばれていたことから、その名をとり『ひろめ市場』と名付けられた。ひろめ市場の中は「鮮魚店や精肉店、雑貨・洋服屋、飲食店など、個性的なお店が集まって」おり、「市場内の至る所にテーブルと椅子が並べられていて、それぞれ自分の好きなものを、好きなお店で買ってきて、持ち寄って食べるスタイルとなって」いる。

高知市ホームページ <http://www.city.kochi.kochi.jp/soshiki/39/hirome.html> (2019.07.29 閲覧)

<sup>7</sup> 日曜日市は、「元禄3年(1690年)以来、300年以上の歴史を持つ土佐の日曜日市。年末年始とよさこい祭り期間を除く毎週日曜日開催されている。「高知のお城下大手筋において、全長約1300mにわたり、約420店が軒を並べている。「新鮮な野菜や果物はもちろん、金物、打ち刃物、植木なども売られており、市民と県外からの観光客などもあわせると1日に約17000人が訪れる生活市」である。

高知市ホームページ <http://www.city.kochi.kochi.jp/soshiki/39/nichiyouchi.html> (2019.07.29 閲覧)

域と一体となって活動している先進事例を紹介してもらい、最終的に行われる自分たちが考える高知の地域振興や高知観光の発掘の発表に向けて理解を促し、地域の活性化にいかに関与していけるかを常に考える構成にした。「安芸市<sup>8</sup>」と「高知市内」、「大豊町<sup>9</sup>」の三回にわたって行われた体験学習時には、自発的な地域住民との交流を促し、地域事情の理解を深め地域活性化の方策を考えるための仕掛けとしてインタビュー活動を実施した。その事前準備としてインタビューシートを配布し、インタビューの仕方やインタビューに対する挨拶、質問の回答に対する受け答え等について説明した後、グループごとに学生同士がインタビューをしあい、設問内容を考案する予行練習を行った。インタビュー内容は、「インタビューについて」、「地域での生活について」、「地域の自慢(場所・食べ物・文化)」、「生活上の変化や困難点」、「地域を活性化するためのポイント」、「大学生への期待」等である。また、体験学習実施後には、グループに分かれてインタビュー活動で得た回答内容をグループのメンバーで共有し合った。

高知の自然や文化に触れてもらうためのフィールド見学や体験活動では、郷土料理であるチリメンジャコ井やカツオの薫焼きたたき作り、餅つきを地域住民のサポートを得て体験した。また、郷土の偉人である坂本龍馬や板垣退助に関連する資料が展示されている高知城歴史博物館や高知城にて龍馬に関する展示パネルや板垣退助が暴漢に襲われた際の短刀等の展示資料を見ながら、幕末から明治にかけての日本の歴史について知見を深めた。さらに、安芸市では三菱財閥の創始者である岩崎彌太郎の生家や武家屋敷を見てまわったり、中山間部に位置する大豊町では、江戸時代の参勤交代時に藩主の本陣として使用された旧立川番所書院を見学したりし、日本の伝統文化を身を持って学んだ。江戸時代から続いている「日曜市」や高知の食が集い県内外からの客で賑わう「ひろめ市場」も見学し、地域の活性化への寄与についても考える機会とした。

このようなフィールド見学や体験活動をする前には、事前学習として講義時間に見学場所についてビデオや写真等で説明した。「郷土料理作り」や「餅つき」などの体験活動では、その場で地元住民が

<sup>8</sup> 安芸市は、「高知市から東へ約40キロに位置し、南は土佐湾に面し、北は四国山地を背にする美しい自然に囲まれた県東部の中核都市であり」、「全国最大級の施設園芸地帯として、ナスなどの環境保全型農業に取り組んでおり、柚子、チリメンジャコの産地、明治時代の野良時計、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された土居廓中の武家屋敷群、岩崎彌太郎生家と三菱グループ源流の地、書道・童謡・陶芸のまち、阪神タイガース・大学・高校野球のキャンプなど、歴史と文化の香るまち、スポーツキャンプのまちとして、全国に情報発信し」ている。

安芸市ホームページ <https://www.city.aki.kochi.jp/life/dtl.php?hdnKey=674> (2019.07.29 閲覧)

<sup>9</sup> 大豊町は、「高知県東北端四国山地の中央部に位置」するため、「平坦地はほとんどなく、耕地は総面積の1.1%に過ぎず、棚田、傾斜畑で形成されて」いる。「四国のほぼ中央部に位置していることから、昔から南北を結ぶ交通の要として、吉野川及びその支流沿いに発展してきた。藩政時代には「参勤交代にも利用された官道も整備され、土佐3番所に挙げられる立川番所も置かれるなど、国防の要の地でもあ」った。ウィキペディア(Wikipedia)によると、「2009年(平成21年)現在、四国地方で唯一65歳以上比率が50%を超える『限界自治体』である。2013年(平成25年)10月1日時点の老年人口割合は55.0%である」と述べられている。

大豊町ホームページ <http://www.town.otoyo.kochi.jp/prof/chisei.php> (2019.07.29 閲覧)

ウィキペディア(Wikipedia) <https://ja.wikipedia.org/wiki/大豊町> (2019.07.29 閲覧)

解説するとともに手本を見せ、それに従って体験学習を実施した。「安芸市内観光」では地元の高校生が、「高知城歴史博物館」では学芸員が、高知城ではボランティアガイドが留学生にも分かりやすい易しい日本語で説明をしてくれ、学生の質問にもその都度回答してくれた。また、各活動の後には、事後学習としてグループでの振り返り学習を行い、地域振興に関する意見交換やフィードバック、地域活性化に関する提案について宿題としてレポートにまとめて提出することとした。そして、一連の地域体験型授業の最後には、グループごとにテーマを絞り、「自分たちが考える高知の地域振興」または「高知観光発掘」について発表してもらい、それらの提言を報告書にまとめて高知県や高知地域に提案をしていった。

### 3.2 地域文化体験型授業に対する学習者の満足度及び感想

地域文化体験型授業を受講した学習者20名の終了アンケートの結果を表2に、地域文化体験型授業におけるインタビュー活動による交流の評価を表3に示す。評価は5点満点の5段階で評価してもらったとともに、その理由を記述してもらった。

表2 終了アンケート評価

No	アンケート項目	5	4	3	2	1	平均
1	地域文化に対する理解の深度	15	5	0	0	0	4.7
2	地元の人々との交流の深度	13	6	1	0	0	4.6
3	地元の人々との交流による理解の深度	12	4	3	1	0	4.3
4	(他の)留学生との交流の深度	12	8	0	0	0	4.6
5	(他の)留学生との交流による多文化理解の深度	7	5	6	2	0	3.8
6	(他の)日本人学生との交流の深度	4	8	3	3	1	3.4
7	(他の)日本人学生との交流による多文化理解の深度	5	7	5	1	2	3.6
8	高知地域文化体験型授業の満足度	12	7	1	0	0	4.5

学習者の授業全体の満足度は5段階中平均で4.5であり、3回の体験学習の満足度においては、「安芸市」が4.6、「高知市内」が4.2、「大豊町」が4.3で高評価を博した。受講生の感想としては、「地元の人々とのコミュニケーションを通して地域文化に対して理解が深まった」、「いろいろな地域に行ってその文化や歴史を体験して、その文化に対しての理解が深まった」、「たくさんの人や地域の魅力を知ることができた」等の感想があった。その感想通り、「地域文化に対する理解の深度」は4.7であり、「地元の人々との交流による理解の深度」は4.3であった。

インタビュー活動を通じた「地域住民との交流」の推進に関しては4.6、グループ学習を行った「(他の)留学生との交流」の推進は4.6、「(他の)日本人学生との交流」の推進は3.4であり、交流の深化としては地域住民と留学生との交流が促され、主体的な活動が展開されたことが分かる。一方、日本人学生との交流に関しては評価が低くなっているが、留学生15名に対し日本人学生が5名であり、5グループに分かれて活動したため相対的に交流が阻まれたためだと考えられる。

表3 地域文化体験型授業におけるインタビュー活動による交流の評価

No	アンケート項目	安芸市	高知市内	大豊町	平均
1	インタビュー目的の伝達	4.1	4.1	4.7	4.3
2	インタビューに対する理解	4.3	4.0	4.3	4.2
3	インタビューとの交流の深度	4.1	3.8	4.5	4.1
4	体験内容の理解の深度	4.1	4.1	4.4	4.2
5	体験内容の意味・方法の理解の深度	4.4	4.3	4.8	4.5
6	体験学習・インタビューの満足度	4.6	4.2	4.3	4.4
平均		4.3	4.1	4.5	4.3

「安芸市」と「高知市内」、「大豊町」における3回の体験学習でのインタビュー活動では、「インタビューの目的の伝達」は、「安芸市」が4.1、「高知市内」が4.1、「大豊町」が4.7であった。また、「インタビューに対する理解」の深度は、「安芸市」が4.3、「高知市内」が4.0、「大豊町」が4.3であり、「インタビューを通じた地元住民との交流」の推進は、「安芸市」が4.1、「高知市内」が3.8、「大豊町」が4.5という結果であった。「安芸市」では交流学习活動に参加した高校生に、「高知市内」では地元の方や観光客に、「大豊町」では相互交流を目的とした地域住民にそれぞれインタビュー活動を行ったが、回を重ねるにつれ目的の伝達や交流の深度の評価が高くなっていることが読み取れる。なお、「高知市内」でのインタビュー活動は地元の方や観光客にインタビューへの協力を仰いだうえで実施しなければならず、落ち着いた交流環境でインタビュー活動に取り組めなかったことが評価が低い原因だと考えられる。

インタビュー活動における感想では、「高校生から地元のお年寄りまで会って地域住民への理解が深まった」、「インタビューを通していろいろな地元のことを初めて知った」という肯定的な意見が大部分であった。一方、否定的な意見としては、地元の方言が交流の妨げになったこと、外でインタビューする際に最初に話しかけることの困難さ、インタビュー時間の不足が学習者の感想で述べられていたが、地域の現状や少子高齢化等の問題を地元住民との交流を通して認識し理解したことがうかがえ

た。

### 3.3 地域文化体験型授業における学習者の提言

地域文化体験型授業の最終日に行われたグループによる最終発表では、「私が考える高知の地域振興」と「高知観光発掘」の二つのテーマで行われ、授業で学んだ体験学習やインタビュー活動を踏まえ提言をしてもらった。「分かりやすいデザインや特定の情報を絵文字で表現した『ピクトグラム』による多言語で表記した地図や案内板の作成」や「県内の他大学の留学生と協力し観光地ごとに多言語に翻訳された看板や地図の作成」、「『イースターエッグハント』のような宝探しイベントの企画」、「短期利用のICカードを使用した路面電車の支払い方法の改善」、「観光スポットでのFree Wi-FiやQRコードの普及」、「他県に先駆けて実施するオンラインマネーの普及」、「テレビCMやSNS等を活用した県内のユニークなイベント、特に自然を活用したアクティビティ等の告知」、「高知の豊かな自然と高知の地元住民の人情溢れる温かさを売りにした地域振興策」、「空き家の民宿利用」等様々な提言が挙げられた。

中でも、中山間地域の振興に適した「スローシティ」への加入の提案は斬新で、留学生と日本人学生の共修により生まれた価値観の創造だと思われるので紹介していく。Weblio辞書<sup>10</sup>によると、スローシティとは「イタリアで起こったスローフード・スローライフ運動から発展した地域文化顕彰活動。シンボルマークはカタツムリ。日本では気仙沼市と前橋市が加盟している」とある。スローシティの加盟条件としては、1) 認証地域の人口は5万人以下であること、2) 州や地方の首都ではないこと、3) 地元の食文化を持っていること、4) 環境を守ることを重視していること、5) 経済活性化や観光を直接目的としているものでなく、より良い住民生活に向かうことの5点を挙げている。そして、開発を抑えつつ持続的な発展を目指すとともに、地域の文化や伝統を守り、生活のリズムを変えずに地域経済を豊かにしていく街づくりを進めていくものである。発表では、「幸せな生活を送っている市民が住むまちには、自然に人が集まる」と述べられ、中山間地域の大豊町で体験した学習の成果がうかがえた。

以上のような提案を実現するには、地方自治体、県民・市民・民間団体等の協力や財源措置が不可欠になるが、アイデアや提案自体はいずれも高知地域の活性化につながるものであり、持続可能な多文化共生社会の実現に向けて自発的・自律的な取り組みが進められていくことが期待される。

## 4. まとめと今後の課題

一学期間を通して地域文化体験型授業を実施した結果、学習者の評価はおおむね高く、地域文化に対する理解が深まったとともに、1対1によるインタビュー活動を通して地域住民との交流が深まり、

<sup>10</sup> <https://www.weblio.jp/content/スローシティ> (2019.07.29 閲覧)

地域の現状を学び理解を深め、学生の立場からいかに地域の一員として自身が貢献できるかを考えるきっかけになり、地域の活性化への意見を有するに至ったことがうかがえた。また、地域文化体験型授業が共通教育の科目となり単位化され、留学生と日本人学生の国際共修を主眼に据えたことにより、両者が対等な立場で学び合う環境が整えられ、相乗効果で多文化に関する理解が促進されたと言える。授業を受講した日本人学生の感想では、「授業を通して、留学生視点での高知を知れたことが新しい発見につながった。もっと早い段階で(2回生ぐらいで)この授業を取りたかった」とあった。さらに、留学生の感想では、「この授業を通して、ほかの留学生や日本人学生ともよく交流ができた。高知の歴史や生活への理解が深まった」とあり、国際共修を通して実践された多文化に対する学びが大きかったことがうかがえる。このような教育活動を通して、地域とともに生きる自覚を育み、地域の一員として活躍することにより、双方向往来の関係の樹立、ひいては地域との互惠関係の構築につながると考えられる。

今後も引き続き留学生と日本人学生との国際共修で行われる地域文化体験型授業を精査し改善を図っていき、留学生を含めた大学生が「地域振興」や「観光発掘」をテーマに提言が行えるような教育活動となるべくインタビュー活動を主軸に据えた、より精度の高い授業の構築を目指していきたい。また、今後は受け入れる側の地域住民に対しても学生との交流を通じて多文化の価値観に触れ、自文化に対する魅力を再発見し、地域に対する愛着や自信を深め、地域に貢献しようとする気持ちにつながっていくような交流を推進していき、地域の活性化の一助となるような授業の構築を目指して改善を重ねていければと考えている。

## 参考文献

- 大塚薫・林翠芳(2016)「日韓中協定校間体験型短期プログラムの実践と課題—高知文化事情に触れる体験を通して—」『韓国日本語学会第33回国際学術発表大会論文集』、pp. 100-105
- 大塚薫・林翠芳(2017)「グローバルな視点に基づいた体験型プログラムの構築—地域文化・観光体験調査の結果を通して—」『韓国日本語学会第35回国際学術発表大会論文集』、pp. 115-120
- 大塚薫・林翠芳(2018)「高大連携による地域文化体験を通じた交流学習活動の教育効果—地域文化理解を目的とした高校生と留学生との交流を主軸として—」『高知大学留学生教育』第12号、pp. 45-77
- 大塚薫・林翠芳(2019)「国際共修による地域文化体験型授業の構築—インタビュー活動を通じた地域住民との交流を主軸として—」『日本語教育研究』第47輯、pp. 127-146
- Gehrtz 三隅友子(2016)「留学生との交流による多文化共生のまちづくり—とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して—」『留学交流』Vol. 64、pp. 20-31
- 佐藤勢紀子・末松和子・曾根原理・桐原健真・上原聡・福島悦子・虫明美喜・押谷祐子(2011)「共通教育課程における『国際共修ゼミ』の開設：留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み」『東北大

学高等教育開発推進センター紀要』第6巻、pp. 143-156

末松和子(2014)「キャンパスにおける共生社会を創る—留学生と日本人学生の共生における教授法の確立に向けて—」『留学交流』Vol. 42、pp. 11-21

『日刊工業新聞』2015年09月16日「深層断面」 <https://newswitch.jp/p/2058>

文部科学省ホームページ「国立大学改革プラン」2013年11月

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/houjin/\\_icsFiles/afieldfile/2019/06/17/1418116\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/_icsFiles/afieldfile/2019/06/17/1418116_01.pdf)

林翠芳・大塚薫・ガルシアデルサスエバ(2017)「体験学習を通じたアクティブ・ラーニング型授業の構築」『高知大学留学生教育』第11号、pp. 77-90

林翠芳・大塚薫・ガルシアデルサスエバ(2018)「留学生と日本人学生の共修による地域文化理解・地域交流を柱とした体験学習型授業の構築」『高知大学留学生教育』第12号、pp. 23-43